

A 基礎 竹の中の小さな人

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え いう

解説 語尾の「ふ」は、この語では「う」と表記する。「言う」の意味を説明する問題ではない。

問2 歴史的仮名遣い

答え つかい

解説 「つかひ」の「ひ」を「い」に直す。前後にある「けり」まで書く必要はない。

問3 古語

答え ウ

解説 ここでは数を正確に一万と数えているのではなく、さまざまなことを広く指す。

問4 古語

解答例 とても

解説 程度の大きさを示す語。「美しうて」を強め、非常にかわいらしいことを表す。

別解・許容 たいへん／非常に

問5 動作の主体

解答例 竹取の翁

解説 冒頭で紹介された竹取の翁が、続けて動作の主体になっている。

別解・許容 翁

A 基礎 竹の中の小さな人 続き

答えと考え方

問6 出来事の順序

解答例 イ→ア→ウ

解説 まず光る竹を見つけ、怪しんで近寄り、筒の中を見ている。「寄りて」の位置を確認する。

別解・許容 イ・ア・ウ／イアウ

問7 数量の読み取り

答え 三寸ばかりなる人

解説 「三寸ばかり」は三寸ほどということ。本文の「なる人」までが指定された8字である。
確認 指定に合う表記・内容であること。

問8 古語と場面

答え イ

解説 この場面の「美し」は「うつくし」と読み、小さなものをかわいらしく思う意味を表す。

本文の現代語訳

① 今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取り、さまざまなことに使っていた。名を讃岐造磨といった。その竹の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思って近寄り、見ると、筒の中が光っていた。それを見ると、三寸ほどの人がとてもかわいらしい姿で座っていた。

B 標準 翁の言葉と暮らし

答えと考え方

問1 会話の話し手

解答例 竹取の翁

解説 「翁いふやう」の後の会話なので、「われ」は話し手の翁を指す。

別解・許容 翁

問2 敬語の対象

答え エ

解説 竹の中にいて、翁の子になるはずだと翁が考えている「人」の動作・状態が高められている。

問3 判断の根拠

解答例 自分が毎朝毎夕見る竹の中に、その子がいたこと。（23字）

解説 「朝ごと夕ごとに見る」「竹の中におはするにて」を合わせる。単に子が小さいからとは述べていない。

別解・許容 自分が日々見ている竹の中に子がいたこと。

確認 毎朝毎夕・日々見る竹／その中に子がいた、の2点。

問4 動作の関係

解答例 翁はその子を妻の嫗に預けて育てさせた。

解説 「養はす」は翁自身が育てるというだけでなく、妻に育てさせる関係を表す。

別解・許容 翁は子を妻に預け、養育させた。

問5 理由の抜き出し

答え いと幼ければ

解説 「幼いので」という理由を表す部分。「籠に入れて」は理由ではなく行動である。

確認 指定に合う表記・内容であること。

B 標準 翁の言葉と暮らし 続き

答えと考え方

問6 前後関係

解答例 竹の中の子を見つけた後。

解説 「この子を見つけて後に」が時の順序を示している。子が成人した後とは書かれていない。

別解・許容 この子を見つけた後。

問7 内容の範囲

答え ア

解説 黄金を見つけることが重なり、翁が豊かになることは書かれる。黄金を生じさせた仕組みや、子の意図は書かれていない。

問8 文のつながり

解答例 黄金の入った竹を繰り返し見つけたこと。（19字）

解説 「このようにして」と前を受ける語なので、直前の黄金の発見と豊かになることを結び付ける。

別解・許容 金のある竹を見つけることが何度も重なったこと。

確認 黄金のある竹／繰り返しの発見、の2点。

本文の現代語訳

① 翁は「私が毎朝毎夕見ている竹の中にいらっしゃることで分かった。私の子になるはずの人であるようだ」と言って、手の中に入れ、家に連れて来た。妻の嫗に預けて育てさせた。かわいらしいことはこの上ない。とても幼いので籠に入れて育てる。竹取の翁はこの子を見つけた後、竹を取ると、節と節の間ごとに黄金のある竹を見つけることが重なった。こうして翁はだんだん豊かになっていく。

C 応用 成長と家の変化

答えと考え方

問1 語句

答え ウ

解説 「ばかり」はおよその量を表す。ここでの「三月」は暦の3月ではなく、経過した約三か月である。

問2 動作の主体

解答例 竹の中から見つかった子

解説 「この児」は養育される対象で、その子が成長する。育てる翁や嫗が大きくなるのではない。

別解・許容 この子／児／かぐや姫

問3 指示内容

解答例 成人の儀式を行うのにふさわしい年ごろ。

解説 後の髪上げ・裳着と語注を結び付ける。ここでは子の美しさの程度をいうのではない。

別解・許容 髪上げや裳着をする年ごろ。

問4 否定の範囲

答え イ

解説 「暗き所なく」は暗い場所がないということ。光が家の中全体に行き渡っている描写である。

問5 現代語訳

解答例 翁はこの子を見ると、苦しさもなくなった。

解説 「見れば」はこの文脈では見ると、のつながり。「止みぬ」はやんだ・なくなったと訳し、打消しにしない。

別解・許容 翁はその子を見たら、苦しいこともおさまった。

C 応用 成長と家の変化 続き

答えと考え方

問6 心情の変化

解答例 腹立たしさがおさまり、気持ちが和らいだこと。（22字）

解説 「慰む」はここでは心が晴れる、気持ちがおさまる意。腹が痛いという身体の変化とは違う。

別解・許容 怒りがおさまって気分が晴れたこと。

確認 腹立たしさ／それがおさまること。

問7 描写と根拠

解答例 三か月ほどで、成人の儀式を行える年ごろまで成長したこと。（28字）

解説 「三月ばかり」と「よきほとなる人」、続く儀式を結び付ける。「早く育った」だけでなく、具体的な期間と到達点を書く。

別解・許容 約三か月で髪上げや裳着をする年ごろになったこと。

確認 約三か月／成人の儀式をする年ごろ、の2点。

問8 人物への影響

解答例 子を見ることで、翁の苦しさがなくなり、腹立たしい気持ちも和らいでいる。（35字）

解説 「苦しき事も止みぬ」と「腹だたしきことも慰みけり」の二つをまとめる。この範囲では黄金や豊かさを説明の中心にしない。

別解・許容 この子は、翁の苦しい気分や怒りを取り除く存在になっている。

確認 子を見ること／苦しみの解消／怒りの鎮静、の3点。

本文の現代語訳

① この子を育てているうちに、すくすくと大きくなっていく。三か月ほどになるころ、ちょうどよい年ごろの人になったので、髪上げなどの準備をして、髪上げをさせ、裳着をする。帳の中からも出さず、大切に世話して育てるうちに、この子の容姿の美しさは世に例がないほどになり、家の中には暗い所がなく、光が満ちていた。翁は気分が悪く苦しい時も、この子を見ると苦しさがなくなった。腹立たしいことも気が晴れた。

D 確認テスト 出会いから養育へ

確認テスト 100点 採点基準付き

問1 歴史的仮名遣い〔10点〕

答え あずけて

解説 「づ」を「ず」に直す。「預けて」と漢字で書く指定ではない。

採点 表記が完全に一致して10点。

問2 古語〔10点〕

答え ウ

解説 豊かさが少しずつ増すことを表す。「ようよう」は読み方であり、意味は「だんだん」。

採点 ウで10点。

問3 指示語〔10点〕

解答例 光っている竹の筒の中

解説 直前の「筒の中ひかりたり」を受ける。まだ子を見たと言えないので、子を指すとは読まない。

別解・許容 光る竹の筒の中／竹の筒の中

採点 竹の筒の中と分ければ10点。単に竹なら5点。

問4 抜き出し〔10点〕

答え 美しきこと限なし

解説 「限なし」は限りがないということ。かわいらしさの程度が非常に大きいと述べる。

採点 8字が原文どおりで10点。

D 確認テスト 出会いから養育へ 続き

確認テスト 100点 採点基準付き

問5 理由と行動〔15点〕

解答例 毎朝毎夕見る竹の中にいたので、自分の子になるはずの人だと考えたから。（34字）

解説 見慣れた竹の中にいたことと、自分の子になると考えたことを一組にする。黄金がもらえると考えたから、とは書けない。

別解・許容 日々見ている竹の中にいることから、自分の子になる人と思ったから。

採点 毎朝毎夕見る竹5点／そこにいた5点／自分の子になると判断5点。

問6 現代語訳〔15点〕

解答例 この子を育てているうちに、すくすくと大きくなっていく。

解説 「この児」は育てられる子を指す。「ほどに」で時間の経過を表し、その間に子の成長が進んでいる。

別解・許容 この子を養育している間に、すくすくと成長していく。

採点 この子を育てる5点／その間に・うちに5点／すくすく大きくなる5点。

問7 描写の整理〔15点〕

解答例 三か月ほどで成人の儀式を行える年ごろになり、家の中が暗い所もなく光に満ちたこと。（40字）

解説 成長の期間と到達点、家全体の光の二種類の描写を示す。光の仕組みを想像して足さない。

別解・許容 約三か月で成人の年ごろまで成長し、家中が明るい光に満ちるほどの存在だったこと。

採点 三か月ほど4点／成人の年ごろ4点／家の中が光に満ちる7点。

問8 全体の把握〔15点〕

答え イ

解説 竹の中の子を家に迎えた後、黄金を繰り返し見つけて暮らしが豊かになり、子を見ると苦しさや怒りも和らぐ。

採点 イで15点。

D 確認テスト 出会いから養育へ 続き

訳と解説

本文の現代語訳

① 今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取り、さまざまなことに使っていた。名を讃岐造磨といった。その竹の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思って近寄り、見ると、筒の中が光っていた。それを見ると、三寸ほどの人がとてもかわいらしい姿で座っていた。

② 翁は「私が毎朝毎夕見ている竹の中にいらっしゃることで分かった。私の子になるはずの人であるようだ」と言って、手の中に入れ、家に連れて来た。妻の姫に預けて育てさせた。かわいらしいことはこの上ない。とても幼いので籠に入れて育てる。竹取の翁はこの子を見つけた後、竹を取ると、節と節の間ごとに黄金のある竹を見つけることが重なった。こうして翁はだんだん豊かになっていく。

③ この子を育てているうちに、すくすくと大きくなっていく。三か月ほどになるころ、ちょうどよい年ごろの人になったので、髪上げなどの準備をして、髪上げをさせ、裳着をする。帳の中からも出さず、大切に世話して育てるうちに、この子の容姿の美しさは世に例がないほどになり、家の中には暗い所がなく、光が満ちていた。翁は気分が悪く苦しい時も、この子を見ると苦しさがなくなった。腹立たしいことも気が晴れた。